

世間のわざ

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第五十五号（一日発行）
平成六年四月一日

北海の古平風土物語（二二） 練場

古平川原に飛行機墜落 一ト一
担任・千葉信夫先生（二十一歳）

高橋 源 五口

ようやく薄黒い小さい機影が見えはじめたのである。それが見る見るうちに大きくなり、ブーンブーン、ゴォーッゴォーッ、ガァーッガァーッとする爆音となった。

みんなが小旗を打ち振る上を飛んで、古平市街の上空を何度も何度も旋回した。二枚翼（複葉機）の大きな機体は、夕日を受けてキラキラと銀色に輝き、胴体には何やら紅いマークがついていた。
爆音はますます高く、ずいぶん勇ましく見えた。

「どやって降りるんだべなア」
「降りれねんだがなア」
「行ってすまうんでねえが」
「おめえ、見ればいいんでねえが」
「へば、わかるんでねえが」
「見でれ見でれ」

仲間同士の言うことはまるでトンチ話のようで、みんなはしゃぎ切っていた。
空を見上げていて首が痛くなつたころ、やっと低空に降りて来て、エンジンの音が低くなつた。と、斜めに滑るようにして「アッ」と思った途端、土手の柳原に脚が引つかかかってしまった。

「バリバリ、バリッ：：：」
「そして「ピリピリ、ピリッ」と片方の脚を土手にかけ、トンボ返りをするような格好で落ちて止まったのである。
みんなは「ハッ：：と身震いしたのであった。
着陸路違い、方向違いの重大敗であったという。

会場の人たちは総立ちとなり警官や消防団の人たちが大あわ

てで走って行った。
乗っていた永田一等飛行士は頭や肩にけがをして、浜町の井上外科病院（元、軍医）に担ぎ込まれた。幸いにもけがは軽傷ですみ、死ななくて良かった。同乗の荒木操縦士は無事であった。

飛行機のそばに寄って見たところ、大きな幅の広いプロペラがねじれて折れ、太くて大きなタイヤの着いた金属の脚はグニャツと曲がっている。幅の広い片方の翼は、張っていた銀色の布が破れ、胴体も破れて大きな

《食糧のこと》

アイヌの人たちは、ふだんは主に魚類を食べているが、漁に使うのは刺網に似たものかアチウカニ（やす）を使う。これで魚を突くが、深い所でこれに柄をつないで使う。とつた魚は、海水で煮て食べる。貯蔵するときには干魚にして囲っておく。秋から冬にかけては海が荒れるので漁は出来なくなり、夏に採って貯蔵しておいた葛（くず）を、油で揚げて食べる。

アイヌの《ことわざ 世間ばなし集》から

食糧にする草で、根を食べるものにはトレツフ（姫百合）、キトウ（ギョウジャニンニク）、アソラコル（黒百合）などがある。これらを採って来て干し、臼でよく搗いて葛をとる。これを丸めて油で揚げるのである。
キトウは茎も食べるがそのほか食用にする草は五十数種もある。
しかし、これらの草は手入れをしたり、特別に作るわけではなく、自然に生えたものである。

穴があいていた。見るも無残な姿に変わってしまった。
「飛行機って、おつかねえもんだなッ」
「けがするんだもんナ」
「あつぶねえもんだなッ」
「ビックリしたッ、冷汗かくもんだナ」
さつきまでの威勢はどこへやら、みんなはビックリ仰天、冷汗をかき、旗を捲いて散会したのであった。
※このときの折れた飛行機のプロペラは、古平小学校旧校舎の運動場に展示してあった。

明日をひらく人びと

講演会を聞いて

結論から言うと、何度も聞かされたお話で、これという新しいことでもなかった。すでにわれわれも大分県のは承知しているし、北海道池田町のことでも本で読んだり、耳にもしているので別段驚くようなことでもなかった。パブル経済以前から古平の過疎を心配していたわれわれ小規模自営者には、生活を賭けた問題なので、このことは

案だし、池田町のワインもそうだった。夕張メロンも一人の篤農家の努力からだった。一村一品が成功すると、それが連鎖反応のようにあれもこれもうまくいくように思われる。

さて古平はどうか？ 他町村の成功例ばかりを見て羨んでもはじまらない。古平には古平なりのやり方があると思う。雇用の現状を見ても、水産加工、特に紅葉子は古平の誇れる特産品だと思われる。生産額も大きなものだろう。もっと製品の多品種化を図り、古平のブランド

故郷を想う 福井孝平

ここ二十年も前から悩んでいた大きなテーマでもあった。

いろいろな講師を呼んできたが、それによってどう変わったのか、住民がどう行動したのか、私自身もどう行動したのか、猛省することばかりである。町も町民ともども繰り返して話し合わねばならない重要な問題であると思う。

「梅・栗植えてハワイに行こう」も小さな村の村長さんの発

商品として、日本一を目指してさらに研究開発してはどうだろう。それには、水産加工団体にドーンと腰が抜けるような研究開発費を助成してはどうか。行政オンチをかえりみず、素人の暴言かもしれないが、手慣れた、永年の実績のある業界だけに、ぜひ町長・議会で検討されてみては？

現在実施中の養殖事業に加え大消費地に近いことを考え ※

古平場所と岡田家

アイヌとの交易で生計消費

松前藩の財政の詳しいことは分からないが、今から百二、三十年前には、アイヌとの交易で千二、千両、鷹（たか）の売上代金千二、千両、漁民などからの税金六百両余り、船の出入りや商業関係の税金などのほか、砂金が採れたこともあり、かなり多額の収入があったという。家臣に対しても、上級の家臣には一定の海岸の地域を与え、そこでアイヌとの交易をすることを許した。このような土地の

ことを普通『場所』といっている。多い時で、この場所は全道で六十箇所以上あったという。この場所を預かった武士たちは、松前の商人から買った品物を自分で仕立てた船に積み、場所へ運んで行き、そこで交換した品物をまた船に積んで帰り、商人に品物を売り、その利益が自分の収入であった。これも年に一回、夏に限って交易ができたが、その時には藩主の許可を得なければならなかった。

※ ると、しいたけ・いちご・花・高級野菜など、元氣・やる氣・本気を出せばまだまだ希望はあると思う。

昔の古平の海は、海草が余る程であった。今見られる磯やけ現象をどう解決するのか。植林とも大いに関係あるはずである。専門家の知識を借りて、将来を見通した環境の整備が必要かと思ふ。置戸町周辺では、漁協が中心になって海や河川を守るべく、山に木を植える運動をして

いると聞いている。生産性のない所には人は集まらないし、人は住めない。生活そのものが成り立たないのだ。人ごとでない現実である。町政も、消費指向ではなく、生産指向に切り替える時期である。たとえ小さなことでも、食べていける町にしないと先が見えてこない。

新しい出発点としてみんなで考えましょう。みんな汗を流しましょう！

一兵卒の軍隊日記

[7]

— ついハナ唄 一発食らう —

本間 銀朔

事務室での仕事は楽ではあったが、緊張した一日だった。

班に戻ると、班長から「明日からは事務室で仕事をするように」、また「これからは演習にも出ないでいい」と言われた。事務室への道は分かっているのに、隊員が演習に出た後事務室に行った。

早速仕事を与えられた。隊長専用の軍の例規、**秘書類**から必要な所を抜き書きすることであった。分厚い例規集の書き取る箇所に細い厚紙が挟んであり、鉛筆一本と消しゴム、かみそりの片刃が道具で、上質紙を数十枚渡された。一日どのくらい書けるか分からないが、書いたのを見ても良かったら「これでいい」とのことである。内容は主として被服に関するものであった。

中隊長は根室出身で小原中尉といい、召集で来たとのことであった。中隊長からは「急がないでもいい。ゆっくり書くように」と言われたがそうもいかな

い。自分専用の机も与えられ、時間が来ると書いたものを机の引き出しの中にしまい、例規を返して班に帰る。これが日課となり、召集解除の日まで事務所通いが続いた。

事務のことはあれこれと教えてもらい、昼食も事務室で食べ

班に帰ると班長に報告するといふ毎日であった。

事務所では、タバコと「あんばん」が時折支給されたが、班に帰ると同じものが全員に支給される。結局二重に支給されたことになる。事務所でお汁粉が出ると、「たくさん食べれ」と言われるが、班に帰るとまたお汁粉であった。事務室にいる時は軍隊にいるような気がしなかったが、やはり緊張する毎日であった。上官に対する言葉遣い

ふるさとの礎

昭和五十年八月三十日
開校百周年記念協賛会

この記念碑は、古平小学校開校百周年記念に当たって「本校の卒業生はこぞってふるさとの礎になれ」という願いをこめて、同協賛会の記念事業のひとつとして校庭に建てられたものである。

碑面の文字は、同校の卒業生（第十九回生）でもある吉田一穂の書から集字し、それを拡大して刻したものである。碑石は、美国川上流で見つけたものであるが、

や敬礼やら、なかなか厳しいもので「今日も一日終わったか」と、毛布にもぐり込むといつともなく眠ってしまう。

事務室に通うようになったら少々上等の服とズボンが特別支給された。これで事務室にいても、そんなに見ずばらしくなくなった。これは中隊長の配慮であった。なにしろ被服関係のおひざ元なので、少し離れた所にある倉庫にはいっばいある。ここには、旭川市内の女の人数毎日仕事に来ていた。

事務室通いも四、五日経ったころ、班員がみんな演習に出かけたので、靴下などを洗ってから便所に行き気分よく鼻歌なんぞを歌って出て来たら、そこにほかの班の班長が立っていた。「ここは軍隊だ！鼻歌なんか歌って——」と言ったかと思ったら「アゴトリ」を一発食らった。倒れなかったがグラツときた。心のゆるみがあったのかと深く反省した。

軍隊では、「員数をつける」と言うことをよく聞く。自分の支給物を持っていかれたら、ほかの班から盗んで来てでも員数を揃えておくことをいうが、これには面白いことがあった。

ふるさととの群像

-5-

演奏と自転車曲乗りで人気の的
——音楽一家・西島留太郎さん——

西島さんの初代重吉さんはチヨンマゲの時代からの床屋さんで、浜町のほぼ現在地で営業しながら古平消防組に入り、後に第一部（浜町方面）部長を勤めた人です。

二代目の留太郎さんは根っからの音楽好きと、まだ珍しかった自転車曲乗りが大好きで、音楽の方は独学でバイオリンやマンドリンを弾いていました。

自転車曲乗りが次第に普及してくると趣味の域をこえて自転車屋も開業し、大正の中ごろ、古平で自転車曲乗りがまだ三台しかないというころに、沢江の△仲谷漁場に売ったのがアメリカ製のピアス号で、町長の月給が七十円のときに百五十円もしたそうです。

自転車の曲乗りも一輪車から始め、普通の自転車を曲芸用の二輪車に改造して、友人だった坂下忠義さんと組んで数々の曲乗りをこなし、当時盛んだった自転車レース会場でそれを披露しては、ヤンヤの喝采を浴びていました。動作が軽妙でサーカ

ス団のような服装をしていたことから、西島サーカス、の異名をもらったそうです。

音楽仲間の中森幸一郎さん、西館純爾さん、中川幸一（小学校）さんらと『愛弦会』をつくり、大いに町内の人たちの慰安と娯楽にも活躍しました。

△7日は、しんなる日

教育環境の整備から 管内にさきがけ学校統合

[昭和39年]

昭和三十九年九月、児童・町民待望の古小平小学校が、海を見渡せる丘の上に完成しました。斬新な建築と、行きどいた施設や設備を整えて、当時はモデル校舎として広く話題になりました。

その年の統計によりますと、義務教育の学校で五学級以下の学校（学校の施設費を国で負担するのに適正でない）と決められた規模の学校）は、全国では総

また、息子さんたちが成長すると、今度は家で『そよかぜ楽団』を結成して、耐乏生活を強いられた戦後の一時期、そのメロディは大人気を博したのでした。楽団は近隣でも有名になって、船をチャーターして余市までも演奏に出かけたことがあったとのこと。

三代目になる当主の観一さんは、得意のハーモニカで、かつてNHKからのラジオ放送に出演したことがあります。

数の十五%なのに北海道ではそれが四十%もあって、教育の成果が期待できないのではないかという論議が盛んになってきました。しかし、学校統合という問題は住民感情もあって、各町村でははれ物にでもさわるような状態でした。

ある時議会で、学校統合についての質問があったのに答えて伊藤町長は、公開の席で初めて学校統合の意志のあることを明

*前号の【阿波萬先生墓碑】で没年が明治二十三年七月十六日となつていますが、これは生年月日で、没年は大正八年十一月十三日です。また、墓碑の建立年月日は不祥と書きましたが、昭和三十年十一月十三日が正しく、お詫びして訂正します。

らかにしました。もつとも町長は、校舎の新築に取りかかった当時から学校統合を見越して、それとなく統合のPRをしていたのです。あらゆる機会を利用しては、新築中の学校の規模や設備の内容を説明して、父母の共感と理解を得ることに努めました。そのような積極的な働きかけが父母の心を動かして、「こんな立派な学校が出来るのなら、うちの子どももそこで勉強させたい」などという声が出始めました。

このような状況の中で、町議会や教育委員会が正式に統合を表明し、本格的に統合に乗り出しました。しかし実際には難問も多かったのですが、住民側の納得する条件を示して誠意ある話し合いをした結果、田満のうちには四月一日、沖・明和との学校統合が行われました。